

## 『奈良名所子供案内』

表題のおもしろさにひかれて、古書店から購入したのが本書である。タテ二四・六センチ、横一七センチ、和紙の袋綴、墨付全二五丁、同一人の手になると思われる写本である。現在は、奈良大学図書館蔵。

筆写年代は弘化五年（一八四八）二月中旬とあるが、同年は二月二十八日に嘉永と改元されるので、改元直前の正確な年号表現であり、たしかな筆写年代であることをうかがわせる。筆写者は不明である。「柳生屋権兵衛所持」の文字も本文と同筆かと思われるので、あるいは柳生屋権兵衛本人の筆写かもしれないが、柳生屋権兵衛についても未詳である。

筆写年代の前、すなわち本文末尾に宝暦八年（一七五八）

## 大学院近世奈良地誌研究グループ

五月の年紀がある。これが著作年代かと思われるが、著作年であることや著作者に関する記載はない。しかし、本文を子細に検討すると、興福寺の金堂、中門、南大門以下の諸堂舎が炎上した享保二年（一七一七）正月の災事が記されており、同時に羅災した南円堂が仮住まいであることも記されているので、享保二年から南円堂が落成する寛政元年（一七八九）正月までの間を著作年代とすべきである。したがって、本文末記載の宝暦八年五月を著作年として問題はないと考えられる。

つぎに、本書『奈良名所子供案内』の内容について関説しておきたい。本書は表題のとおり奈良の名所を、旅人を

伴なつて子供が案内してまわる筋立てとなつてゐる。旅人は通りすがりの道者で、子供が道者たちに向つて、猿沢池畔で、「せんべい買ふてなげさんせ」とよびかけることから始まり、声をかけられた道者たちが、「やい子供、銭くれべい、春日案内し申せ」という応答によつて、名所案内が開始されていく。地元の子供が名所を案内してまわるという構成は、江戸時代の名所案内記に若干みることができ、本書は初めから終わりまで子供が旅人をリードしながら名所を案内してまわつてゐること、全体が会話調、話し言葉であることなど、他に類を見ない特色をもつ案内記であるといえる。

会話形式の名所案内であるというためであろうか、文体が七五調風で、じつに歯切れよく展開されている。そして、歯切れのよい文章のなかに、ユーモアやかけ言葉、駄洒落を折り込み、娯楽的な読み物、楽しい名所案内をめざす著者の姿勢をみることができ。しかし、案内者すなわち著者の教養の広さ高さをちりばめた結果、子供案内という建前を逸脱し、「それといわねど色めきて、二世とかわせし妻定め、親とおやとの約束も、また殿寝せぬふところの、内よりも、とめきやら」といった、大人の語り口調とな

つてゐるところも少なくない。

さらに本書の特色は、単なる名所旧跡案内だけではなく、猿沢池から春日社境内を経て東大寺そして興福寺へとという奈良名所めぐりのコースをしつかり設定していることと、その名所めぐりコースの途中における茶店などでの休憩、参拝所での拝札の仕方や賽銭等についても、具体的に提示していることが注目される。江戸時代中期における奈良名所めぐり、その実態のひとつまがうかがえる貴重な史料である。

本書の原本または他の写本が発見されれば、奈良における観光開発が社寺観光というかたちで進んでいった経緯が、すこしでもさらに明らかとなることであろう。とりあえず、正確な史料の翻刻と校注を提示して、今後の研究に資することとする。

〔付記〕

本書は、二〇〇一年度の奈良大学大学院文学研究科文化財史料学専攻（博士前期課程）の日本史学演習Ⅲ（鎌田道隆担当）のテキストの一つとして用いられた。共同研究というかたちをとり、参加者全員で分担しながら解説と校注の作業をすすめた。ゼミナールには正式受講者以外にも多

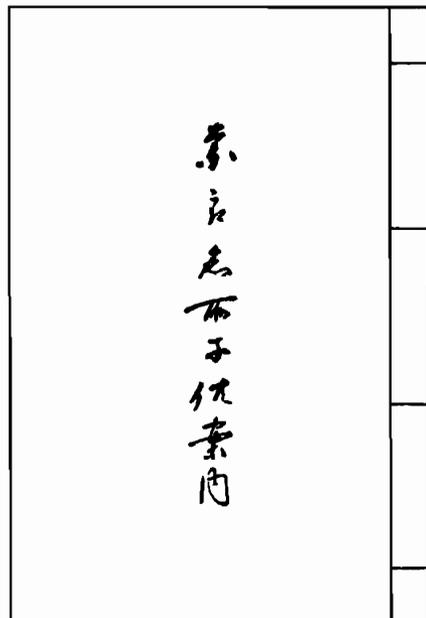
くの院生が参加した。こうした参加者を含めて、大学院近世奈良地誌研究グループとよぶこととした。構成メンバーは次のとおりである。

鎌田道隆	風間厚徳	高坂麻子	寺田 景
伊藤 淳	金松 誠	佐々木大知	松浦暢久
大木祥太郎	神田雅子	澤田くみ子	松本大輔
大北雅浩	北堀光信	杉江裕子	

凡 例

- 表紙を除き、本文については一オ（二丁目表）・一ウ（二丁目裏）のように、改丁改頁を示した。
- 変体かなは、かな文字に改めた。
- 異体文字、旧漢字は通用の字体に改めた。
- 文中の読み点は解読者が付した。
- 本文中の表記は可能なかぎり原文のままとし、校注者の注記は（ ）で示した。
- 補注は文末にまとめた。

（表紙）



（一オ）

奈良名所子供案内

申、道者達せんべい買ふてなげさんせく、道者、やい子ども銭くれべい、春日案内し申せ、あいく私がおしへませう、まづ是が猿沢のいけ、明神の御鏡の池でござります、くもらぬ御代のためしやら、夏の土用のゑんてんにも、うき草一本はへもせず、水もにこらずすむ魚の、鯉と鮒と

(一ウ)

でござります、せんべ買ふてなげさんせ、よろこんで出ます、水のおもてはしづやかに、なみハた、ねど采女の宮、うしろむいたるいはれをバ、あら／＼申てきかせませう、是ハ古へ雨の帝の御時に、采女と云しうへ人の、始メハえいりよに叶ひしが、ほどなくおほし捨られて、君をうららミてあのいけの東なハ、小袖をぬいできぬかけの柳、采女

(二オ)

此世をさる沢の、池のミくずとしづまれました、みかど哀とおほしめし、此さる沢に御幸あつて、采女がしがいをあいらんあれバ、さしもさばかりうつくしき、たんくわのくちびる色かわり、にうわの姿ひさかへて、いけの藻くづと乱れうく、御哥に

わきもこがねくたれ髪をさる沢の

池の玉も見るぞかなしき

とあそばし、此宮居にはるこめられました、

(二ウ)

去れ共いけを見るもうらめしとて、うしろむいてござりま

す、此堀の内ハ興福寺、下向にかつてがよござんす、むかふの御殿ハ大乘院御門跡でござります、是ハ又唐土にてハあらねども、楊貴妃桜でござります、茶屋のうしろハさぶの森、もりてのよい此茶屋で、素麺なりともあがりませぬか、お慰にもなりのよひ、十三鐘を見せませう、是ハ

(三オ)

むかし十三に成るわらんべか、鹿を殺したそのとがで、ざいくわにおこなわれました、爰ハぼだひのかねなれば、七ツと六ツとの間をば、夜明に十三つきまして、鐘のくどくになき人の、未来のくげんたすかりて、弥陀の誓ひにあふミ堂、児観音もござります、さあ／＼こちへござりませ、いそぎハせねどはしり井の、水も名所でござります、爰ハ名に有ル

(三ウ)

春日野の、木々の木すゑもおのづから、ゆたかに照す春の日の、神のちかひに大鳥居

哥に 榊葉にゆふしでつけて打はらふ

身には穢のくもきりもなし<sup>(11)</sup>

又右の方のまつハ、明神影向の松と申ます、御祭礼の時、此松にむかつて式々の事がござります、御旅所今少シ、馬出シのはし、轟の橋から空を打ながめ、雲井坂まで飛火野の、野守の

(四オ)

池の在所、私ハしかとぞんじませぬ

哥に 春日野の野もりのかがみこれなれや

よそに三笠の山の端の月

春の長閑なけいきをバ、南のかたハ浅香山、秋はす、きも穂に出ル、尾華が谷も名所でござります

哥に 浅香山かげさへミゆる山の井の

あさくはものをおもふものかな

同 春日野のわかむらさきのすりころも

しのぶのミだれかざりしられす

爰ハ御旅所、御祭礼その時ハ、黒木の御殿が

(四ウ)

立まして、若宮さま出御ましまして、霜月廿七日ハ、

色々のけしき、國中より参詣貴賤群集賑わひ、昔が今にかわりませんと申ます、やあうかくとくるうちに、是鹿道でござります、此水をハいざ川と申ます、上にハ水も不自由二ござります、此水にて御手水なさりませ、道者、やいさ子供、二筋ある道を六道といふハいわれが

(五オ)

あるか、謂は私ハ存シませんが、鹿の道と書故二、名付ましたでござりませう、鹿の次手二、夫々鹿がたと奇まする、鹿ハ春日のつかわしめ、菓子でも買ふてなげさんせ、明神さまの御悦、其替りに、いか程長旅被成ても、道は慥で御ざります、去共長の旅の空、譬にも申ます、いとしぬ子には旅をさせ、難波になてよしあしを、

(五ウ)

思ひ出すハふるさと橋、又石橋ハよひ方へ、趣くとの事じ

ややら、善趣の橋と申ます

哥に 千早振我こ、ろよりなすわざを

いつれの神か余所に見るべし

万葉集 はねかづらいまする妹をうらわかみ

いさ率川のおとのさやけき

さあ此道へ御ざりませ、誼にもうたひます、車屋とり、馬とゞめ、爰からこし車ハ成りませぬ、皆さま頭巾も笠も鳥居の内

(六オ)

哥に 鳥居たつ左右も高間原なれば

あつまり給へ四方の神く  
是が末社のはしまり、悪事さいなん祓戸燈籠の幣、とりぐくに御身をはらふてござります、又東の方ハ、神垣の森と申ます、是にも哥がござります

神垣の森に木の葉ハ散しきて

尾華そ残る春日野のはら  
左の方ハ悪魔を払ふ劔先道、さあ〜こちへ御ざりませ、すぐ成ル道ハ納受ある、先神前へ

(六ウ)

着到殿、毎日の参詣を着到に、御付なさる、とやらん申ます、御本社ハ、此南門の内、四所明神でござります、遠くよりの御参詣、備前の国でハあるまいが、とくりと

拝まんせ、信心あれバ利生あり、門の前なハ赤童子の影向石、此石ハ大般若と萬座の祓ひをつきこめました、歩を運ぶ輩は、心の如成ル故に、如意石と申ます、また此橋ハわけ

(七オ)

しらねども、布生橋と申ます

哥に 有難や布生のはしを打渡り

手向の神楽聞ぞ嬉しき  
嬉しくも又有難や、神ハ衆生を哀れミて、慈悲万行の光りさす、道を照らすや燈籠の、かずにもあらぬ我等まで、めぐミ洩らさぬ此社、昔から何ン年たつやら知らねども、お年もよらぬ若宮さま、若が花ぞ皆さまも、年寄ル事がいや

(七ウ)

ならハ、よふ御きねんなされませ、御神楽ハ百文宛九十六までいきたくバ、鈴いたゞいてござりませ、命ながお思ふ願ひの叶ひます、又此宮を三十八社と申ます、是からおくが奥の院、此山の主なれど、神と神との義理あいにて、

明神影向やうがう有ありし時とき、地を三尺かし給へ、お主ぬしハ奥おくにひつそりと、つぼミし藤ふじの鳥居とりい あり、咲見さきみだれたる折柄おりから

(八オ)

は、たれ人も心慰こころなぐさ、此花このはなの、陰かげにやすらひ詠ながむれハ、暮くるも知らぬ春はるの日の、神徳しんとく爰こゝにあらわして、誓ちかひぞふるき奥おくの院いん、紀伊きい社やしろでござります、代々よゝゝを重かさねていつまでも、契ちぎりかたき二ツ石ふたばし、女神がみ男神おとこの二柱ふたばしら、此間こゝより向むかひの石いしの目め当あハ、太神おほがみ宮みやふし拜おがミ、拜おがむこ、ろにめぐミある、まづ此こゝしげりを三笠山さんかさやま、もと八端山はつたんやまの陰かげ浅あく、木陰こかげとでもござり

(八ウ)

ませなんだ、御陰おかげをたのミうゆる木の、元来もとよりめぐミふかければ、かやうのミやまとなりました、されども何程なほほど大木おほきに成なましても、三尺下江根さんしゃくかゝねがさ、ず、三尺上さんしゃくかみをどこまでも、のう／＼とのうめくばかり、是こゝがめいよでござります、是こゝから跡あとへもどります、とく／＼とおがまんせ、又また此山このやまの御主おんぬしを、榎元えのきもとの社やしろじやと申人まをすひとも御座おんすまります、どちらが定さだやらしらねども、顔かほを赤あかめてろんごの屋やハ、明神あきかみ

(九オ)

さまの御おんあひ被ま成なりました、尊たかしい明專みやうま(恵)上人おんじんの、絵像えぞうが懸かて御座おんすまります、拜おがんでお下くだりうなざりませ、此道このみちを仲間なつかま道みちと申まをす、又また此橋このはしハうき世よをバ、ひとり渡わたるハ物淋ものさびしきが、よき夫婦ふうふ諸共もろともに千とせを懸かて、かたらひの橋はしと申まをす

哥うたに 何事なにこともかなふ三笠山さんかさやまの間道まにち

杉すぎのしるしやかたらひのはし

此手水このてみづはちへ落おちくる瀧たきを、青龍瀧せいりゆうたきと申まをす、

(九ウ)

水みづかきの外ほかなハ、榎元えのきもとの社やしろと申まをす、是こゝくわいらうつとふて御おんざりませ、是こゝハ春日かすがひの御供所おんくうじよ、三さんきね半なみの黒米くろこめ飯めしくわげんで、御供おんくうこそなへます、又またいがきの内の社やしろハ、船戸ふねどの社やしろと申まをす、長ながの旅路たびぢの海川うみがわも、追手おいての風かぜもおだやかに、波なみも静しずかに行船ゆかふねの、渡海わたるうみを守る神かみなれハ、一入ひといりお願ねがなされませ、右みぎの方安居あんなこの屋やと申まをす、後白川ごしろがわの法皇ほうわう、紺紙こんし金泥こんでいの一切いっさい。

(十オ)

経きやうが御座おんすまります、夏げ百日ひゃくにち之間の間ま拜まをします、されども女人おんな

ハなりません、夫も望ハ門前へ、御経を以て出まする、皆やミなさま、あれあれを見やしやんせ、春のけしきの面白や、神に祈をかけまくも、内色ある花見酒盛、余所目もはじめは、からず、しやくをとるやら手をとるやら、三味線ひくやら袖ひくやら、うとふつまふつざめいて、あいのおさへのすけのとて、たび重りし

(十ウ)

盃の、さいつさ、れつたわむれて、のめバ甘露の日傘、さしかけさせし折ならず、町のふうしてぼつとりと、しまだも人の目にたぬ、外をしら齒の小娘の、新おはぐろもいつじややら、待兼らしきおもかげや、ひなたを見せぬしるしやら、うすかうばいで色白て、よいおひたち奈良の葉の、木草もおのが時分とて、それといわねと色めきて、二世とかわせし

(十一オ)

妻定め、親とおやとの約束も、また殿寝せぬふところの、内よりも、とめきやら、にはひゆかしきふり袖の、後につる、こしもとの、当世帯の結びさげ、ながきいもせのな

りふりの、よいものごしややさしらし、聞よし見よし心よし、是を合て三吉野の、華の盛を今爰に、うつせしとても此花に、いかでまさりやあらむの年の格好姿から、

(十一ウ)

よふもそろふて美しき、唐のくし君わうしやうくん、小野小町ハしらねども、いづれをあれとわかかねて、そゞろにあゆむ足もとに、につとしりめに笑顔、見るに気も晴空はれて、春の霞も晴れば、いとゞ心もはれやかに、猶行先もいさぎよく、水屋社でござります、是ハ御内義さまな人ハ、よふ御祈念なさりませ

(十二オ)

哥に 春日山水屋の水のすへかけて  
神にまかせて身を頼むかな

是が末社の仕廻でござります、是から先ハ東大寺、跡ハ水屋の此茶屋で、少々御休ミ被成ませ、さあ皆さま御座りませ、御国の親達御内義さま御子達にも、早あをくとなりのよい、若草山でござります、つゝら山とも申ます

哥に 今となを妻やこもれる春日野の

若草山に驚そなく<sup>(45)</sup>

又余りうつくしむ山じやとて、唐人が望ましたと申ます<sup>(46)</sup>

(十二才)

此山唐までやるならば、だちんが大ぶん懸りましよ、又右の方の御社ハ、天下泰平を守ら七給ふ神なれハ、武運長久千代萬歳、いらぬハ弓矢八幡宮、民も豊にさかふれば、人の心もゆるやかに、花の三月堂、空すみわたる折柄に、我はしらねど濁る身を、清る瀧の水の音、いつもかわらぬ御仏の、大慈大悲の觀世音、現世未來を両がけに、すぐわせ給ふ二月堂、

(十三才)

年々二月朔日より十四日まで、昼夜行あらたな事で御ざります、大たいまつを内じんへ入ますれども、何のしさいもござりません、此様成行法、天竺にハ有とやら、唐にもないと申ます、又此おこなひにあひました、あらたな牛王が御ざります、道者、牛王の事ハ、おらが国でもたつとみ申す、国でハ大切だから所望申すべし、爰でさへ大切に御ざります、銭かねでハ成ません、お望みならば

(十二才)

五日も十日も、御逗留被成ませ、縁を求めてもろうて進せませう、道者、何ばかな事おんじやり申す、長旅じやからそふハならなひ、まあく下へおりさんせ、此榭の内ハ、若狭の井戸と申ます、常にハから井戸で御座ります、二月十二日夜丑ノ刻、行法の出家達が御入被成まして、わかさくくと御呼なされますれハ、大ぶん水かわきます、七荷片荷を扱上けて、内陳にて

(十四才)

勤行の御つかい水に成ます、此水若狭の遠敷と申所よりわき出ると申ます、さあ又こちへ御ざりませ、長閑き春も過行ば、永き日影も暖に、空のけしきもおのづから、心夏めく四月堂、又此杉ハ良弁杉と申ます、良弁僧正おさなき時、驚につかまれ此杉の、枝のしげみに入おきましたと申ます、是ハ又大仏の釣鐘で御座ります、哥に

おく霜の花いつくしき名も高し

ふりぬる寺の鐘のひ、きは

(十四ウ)

つかすとも、皆さまの方へ聞へませふ、夜ハ一度ツ、是生滅法鐘のこゑ、今に絶くせぬ法の道、遠キ嶋々唐迄も、お主ハひよつくと御身のかるひ、蓮の実の御杓にて、観(勸)進す、めに御渡り被成ました、俊乗坊の御影堂、又糸桜とて、見事な花の御ざりました、いづれの世の、いづれの春から咲初て、いつから爰にいとざくら、いつまでもとおもひしに、いつ又かれて花ハ根に、かくれど

(十五オ)

残すおのが名に、春とて咲花を、今見るやうに思る出の、春は花見の遊さんとて、人々さ、ゑのさ、のたわむれに、花見る空は曇らねど、ふり袖やらワき詰やら、見事な華がちらりと、当世模様とうせいもようの紅裏ももこうらに、釈迦しやくかも今ハぞつとする、大はとほきな仏てござります、御せいの高サ八十六丈、立て御座らハ、堂の立やうが御ざりますまい、あれでさへ御ものが入ませう、初メハ雨露あめつゆに

(十五ウ)

ぬれて御ざりました、今是程に成ましたも、大仏の後光じ

や、泊(箔)代しちの奉加ほうかに、ちつと御奇(寄)進しん被成ませ、其くどく外ほかへハ参りません、南に残る南門は、むかしの名残有難ごりありがたひ、東の方東南院とうなんなんいん、是から廻廊見渡せば、扱く、どこからどこへよしき川36

哥に 春くれハ衣かすがのよしき川37

よしもあらぬかいかめを見ん38

左りに見へたる、古ク見るれと真言院39、かうぼう

(十六オ)

大師て御座ります、さあ又こちへ御座りませ、是ハ大仏観進所、一向宗でハ御ざりませんが、ごかうしゆひの弥陀如来、次の御影ハ龍松院、此度大仏堂建立の、上人さまで御座ります、さあく皆さま、茶の錢いらぬ施茶がある、御茶もたばこもあがりませ、又是より北に、御宝蔵ごほうざうが御座ります、数多の宝の其中に、一の宝ハ蘭奢待らんじやたい、昔ハ開封の度毎二、

(十六ウ)

壺寸ツ、御切被成ました、壺寸切ば壺寸ツ、重ての開封まで延ましたゆへ、後からハ、御切被成ませなんだと申ま

す、蘭奢待と申文字の内に、東大寺と申文字が御座ります、又西ノ方ハ、此頃けつかうに成ました、戒壇(壇)院と申ます、爰ハ水門、皆さまはあつまと見たハ違ふまい、言葉なまりを聞クたびの、泊りくや中喰の、手都合のよひ拍子の神、

(十七オ)

皆さま何も柳にやらしやんせ、みどりが池がござります、爰に北成ル小坂をハ、雲井坂と申ます

哥に 村雨のはれまにこせよ雲井坂

三笠の山は程ちかくとも

南の方の板橋を、轟の橋と申ます、是ニも哥がござります

哥に 打渡る人目もたへすゆく駒の

ふみこそならへと、ろきのはし

興福寺ハ此堀の内、七堂伽藍の靈地なり、此門からはいらんせ、右の方が観禪あん、八重桜ハ

(十七ウ)

此所ニ御座りましたと申ます

哥に いにしへの奈良の都の八重ざくら

けふ九重に匂ひぬるかな

さあこちらへ御座りませ、是ハ中院の屋、常ニわ人を入れません、此次ハ御宝蔵なり、何か有やら存ませぬ、又此唐門ハ、興福寺御寺務一乘院 宮様で御座ります、むかふなハ北円堂、ミろくぼさつ八年を経て、ミろくの世じやと申ます、

(十八オ)

又堂ハ始メから、釜くどハ御座りませなんたけれ共、へつついどのと申ます、からん炎上の以来、観進所ニなりまして、是ハ食堂と申ます、千手観音南向、東の方ハ順礼九番の札所、南円どうがやけました、八百屋お七じやなければども、普請成就致すまで、仏も今ハ借り住居、おいとしやと申ます、皆さまも奉加ニ付て下さんせ、観音さまハ

(十八ウ)

御慈悲のぐぜいの船にさほさして、待てござると申ます、是ハ又東金堂、薬師如来指(脇力)立ハ日光月光、下座ニハ文珠維摩居士、文珠ハ知恵ばさつ、知恵の次手に思る

出した此寺の、三つの宝の御事を、聞た通り申ませう、昔天智天皇の御時、唐の高崇（祖）皇帝より三つの宝が渡りました、花源馨、泗濱石、ハ、つ、がなく京着ク致しました、近比も開帳が、

（十九才）

御座りました、面向不背の玉ハ、讃岐国房崎の浦にて、龍宮へとられましたと申ます、然ルに淡海公、余り残念におほしめし、海士おとめと契りをこめ、房崎の大臣と申御子を、もふけ給ひし時、海士人おとめ申やう、御子を世つぎの御位に付給ハ、かの玉をかつき上ケ申べくと、海中に飛入て、取かへしたと申ますれと、謡にも玉ハ知らす海士

（十九ウ）

人ハ、海上にかみ出たりと謠ますれば、其時からしれなんだか、ついに拝見申た人ハ御座りません、道者、何さ海士の乳の下より、光明かくやくと有ル玉をとり出した、是ハ又どうだ、成程玉ハ、とり返しましたれど、逃る所を龍神か、手ひどく追かけまして、隠す所ハ御座りませす、

是悲なふ乳の下を切ツて、玉をおしこめました、是ハ人の

（二十才）

悪口かも存ませぬが、めつかうくさいの玉しやと申人も御座ります、それで宝には成申さぬによつて、又海へ捨たものでかな御座りませう、私が聞たハ此通り、始終の事ハしらねども、五重の塔、ハ四方正面阿弥陀如来で御ざります、扱又やけた堂の事、もつたないやらおしいやら、申も涙がこぼれます、本堂ハ金堂とて、丈六の釈迦如来、

（二十ウ）

ごくさいしきのけつかうさ、七宝莊嚴の巻柱ハ、狩野の筆一ツとも二ツとも并なき、三国一の出来ものと、しるもしらぬもほめました、其外講堂、西金堂、数多の伽藍、一時の煙となりました、是此石すへの跡、大きな事でハ御座りませんか、時節とは申ながら、おしい事じやと申まする、道者、てつかい事だから、国かたへも聞へ申た、ゑんしやうハ

(二二一オ)

いつの事だ、享保貳年で御ざります、ゆるりと年をとりの年、飛で来るやはやくと、ふくハ内へ入りまめで、外へ打出す節分の、鬼よりこわひ大晦日、一夜越れハわつざりと、こゝろ若やく蓬来(萊)の、山はこぶかきところかや、かちぐりを吉礼も、枝葉栄る若まつの、緑をなして萬代やよい寿ハ身に添へて、年の積りハ橘の、数重り

(二二一ウ)

ていつまでも、かうし門を出ずとは、うそといわれぬ本儀、積かさりたる三宝の、しらげの米ハみちくくて、先祖代々ゆづり葉に、金と銀とのかわらけを取あげ、老の身の、海老の腰ほどかゞみ餅、皆ミチ揃っていたゞきて、おもふ事なき正月を、いわ半納て三ヶ日、たつやた、ずに四日の夜、五ツ比でも御ざんせう、講堂から出火して、此やうに成ました、

(二二一オ)

道者、扱も残念千萬成ル事だ、何ンと本尊ハ出し申たか、おもふても見やしやんせ、しゆるうこうろうに至るまで、

大小かけて十六棟、一度にやけた事じやもの、殊に大きな仏さま、出すとんじやくハ中く御座りません、国中から欠付て、ちいさい仏ハ出したかもぞんじませぬ、権者の作仏達、お主の御身のやけるを、知らぬが仏で御ざります、未来でハ人を、

(二二一ウ)

おたすけなさる、と申まする、国が違へばならぬやう、現世ハ人にたすけられ、又あれ程の堂塔の、残りしましたも、仏のひかへのつよきゆへで御ざりませう、もうなんにもとふて下さんすな、私ごと、さまか、さまの、咄聞たばかり見ぬ事を申のさへ、むねがいとを御ざります、是ハ又南大門、毎年二月七日より十四日まで薪の能が御座ります、則此芝の上にて致し

(二二一オ)

ます、又南に見ゆる塔ハ元興寺、昔ハ六町四方のがらん所であつたげな、今ハ町家に成りました、観音堂と塔と斗り、御道筋なれハ案内にも及ません、先是まで、御座ります、くわしき事ハ、名所記御もとめ被成ませ、御国元

への土産、奈良晒、油煙墨、悪魔を払ふ文珠四郎、打も  
の御望ハ御ざりませんか、あんに相違のござりません、

(二二二ウ)

奈良まんちう召て、御口いわ弁被成ませ

宝曆八戊寅年五月

弘化五戊申歳二月中旬写之

(二二四オ)

柳生屋

権兵衛

所持

補注

(1) 猿沢池の月は、奈良八景の一つ。池の形は乃の字で東西五

〇間、南北四〇間ある。

(2) 猿沢池の西ほとりにある。

(3) 衣掛柳。

(4) 詠者は柿本人麻呂で『拾遺集』におさめられている。

(5) 一乗院に並ぶ、興福寺両門跡のひとつ。権大僧都隆禪が康和二年(一一〇〇)に興福寺寺地の東方(春日野の西端)に創建した。

(6) 興福寺に玄宗法師という人物がおり、その玄宗法師が愛した桜ということでの名がつけられた。

(7) 『大和名所図会』の図中には「アクサブノモリ」とある。「アクサブ」には「悪左府」の字があてはまり、宇治悪左府と言われた藤原頼長のことを指すと考えられる。

(8) 奈良興福寺の東南にある法相宗の菩提院にある鐘。三作という少年が鹿を殺して石子詰め(の)の刑に処せられたという、この鐘にまつわる話が有名である。

(9) 十三鐘のある菩提院にまつられている像。菩提院は別名大御堂とも言う。死んだ子供が金色の十一面観世音になったとの言い伝えがある。

(10) 興福寺東金堂の裏手に「花の井」があり名水とされている。

(11) 『春日古記』にある、大鳥居を詠んだ歌。詠者不明。

(12) 大宮の神事として春日祭があり、霜月の御祭というのが若宮の神事である。霜月の御祭に際して、御旅所にて流鏝馬、相撲、能などを行うと『大和名所記』に解説がある。

(13) 大鳥居の東にあり、春日の行宮ともいう。常には宮居なく、霜月の御祭に際してかりなる神殿をいとなむと『大和名所図会』にはある。

(14) 大鳥居の東側にある小さな橋。轟の橋は東大寺、興福寺両

寺の中間、押明の門の南ほとりにあるという橋。

(15) 轟の橋の北にある坂。

(16) 東大寺の前に北向の荒神という社があり、その所を飛火野という。飛火とは、軍器の狼煙・烽火である。飛火野のさぎ原に清水があり、野守池は野守鏡とも称す。野守のいわれは烽火を守るという説と、単に野を守るものとする説がある。

(17) 『新後撰和歌集』第五卷秋歌下所収。詠者権大納言師信。

(18) 『万葉集』第十六卷(三八〇七)には、「浅香山影さへ見えて山の井の浅きハをわが思はなくに」とある。

(19) 『新古今和歌集』第十一卷所収。詠者在原業平。

(20) 鹿道には参詣人目当ての茶屋・饅頭屋・餅屋等の店が営業しており、鹿道において営業する店は、「火用心」・「立宿」の禁止など春日社内の秩序維持の義務が同時に課せられていた。

(21) 春日山中、春日大社東南紀伊社の南溪に発して西流、蓬萊池・荒池を経て猿沢池南辺を過ぎる。そのほとりには、率川宮・率川社がある。

(22) 慶長五年(一六〇〇)の制札には神鹿を弄する違反の輩は厳科に処する條目があり、鹿守を置いて鹿の安全管理をおこなっていた。更に、野犬・畜犬の徘徊を取り締まらせ奈良市街に木戸を設置し、郊外に逸脱するのを防止した事が見える。

(23) 六道の途中、板で架けた橋が古郷の橋、石でわたしたしたもの

を善趣の橋。

(24) 『南都名所集』によれば、「春日古記」からとつたとされ、詠者不明。

(25) 『万葉集』第七卷(一一二二)所収。詠者不明。

(26) 『南都名所集』によれば、「春日古記」よりとあり、詠者不明。

(27) 祓戸神前にあり、祓戸神社は、瀬織津姫ノ命を祀る。神垣森は、祓戸神社の北にある。

(28) 『南都名所集』には「風雅和歌集」からとつたとあり、「風雅和歌集」第八卷冬歌に所収。詠者は、院兵衛督。

(29) 祓戸神社の斜め前から本道をわかれて左へ上る坂道で、本道に向かった道が剣尖になっている。

(30) 神垣森より右の方にあり、延喜十六年(九一六)の造立。

(31) 三笠山の麓に御鎮座あり、武甕槌神・経津主神・天兒屋根尊・天照大神を祀る。

(32) 着到殿南門の南。また御間の橋ともいう。

(33) 出典は『春日古記』。詠者不明。「手向」とは手向山神社のこと。

(34) 若宮の南。『奈良曝』によれば仏家には般若の十六善神、薬師の十二神、法華の十羅刹女を合せて三十八神とする、とある。

(35) 若宮から南奥にある。紀伊社を奥の院と呼ぶ。

(36) 祓戸神社を登り詰めた所にある。昔、鳥居のあたりに藤があり、春ごとに咲き乱れて栄えたことによる。

(37) 着到殿の東。春日山の地主。

(38) 『春日古記』には「何事もかなふ三笠の中間道杉の下枝かたらひのはし」とある。詠者は解脫上人。中間道は榎本神社から若宮へ行く細道。かたらいの橋は若宮への参道にある小さな橋。

(39) 榎本神社の石段下にある瀧。

(40) 榎本神社の内侍門の下西の方にある。

(41) 道祖神。海上を守るので旅人が参詣する。

(42) 御供所の北。この屋で御供をととのえる。

(43) 大宮外院十一社の一つで、大宮の北に位置する水谷神社のこと。

(44) 『夫木和歌抄』第二十六卷水部所収。詠者は衣笠大臣。「春日山水屋の水の末までも神にまかせて身を頼む哉」。

(45) 『夫木和歌抄』第二卷春二鸞部所収。詠者は宗尊親王。「今もなをつまやこもれる春日野の若くさ山にうくひすのなく」。

(46) 東大寺法華堂の南東。天平勝宝元年（七四九）十二月、聖武天皇大仏造営の時、宇佐八幡の加護を祈らんとため、東大寺の鎮守として勧請。

(47) 大仏殿東、法華堂。天平五年（七三三）良弁僧正開基。東大寺の前身、金鐘寺。本尊は不空羂索觀世音菩薩。

(48) 二月の滝。法華堂の北、大黒天堂の傍らにある。

(49) 法華堂の北。若草山麓の高所に位置。天平勝宝四年（七五二）実忠創建。本尊は十一面觀音（大観音）。他に実忠感得

の觀世音菩薩（小観音）。寛文七年（一六六七）二月炎上するが、二年後に徳川家綱が再建。現在に至る。

(50) 修二会で用いる水を汲み上げる井戸。二月堂前にある。

(51) 東大寺境内にある御堂。二月堂の正面に位置。

(52) 東大寺二月堂前、若狹井の裏手にある杉。

(53) 東大寺の鐘は南都八景のひとつ。詠者は前大納言四辻入道喜成といわれている。

(54) ここでは、俊乗坊重源の像が置かれている堂のこと。

(55) 聖宝尊師の建立。荒廃のところを竜松院公慶上人が再興した。

(56) 東大寺南大門のほとりの川。

(57) 『万葉集』第十二卷（三〇一一）詠者不明、「我妹子に衣かすがの宜木川よしもあらぬか妹が目を見む」。

(58) 弘法大師の造立で、大師の尊像がある。

(59) 正倉院のこと。

(60) 正倉院所蔵の香木。東アジア原産の沈香という高級香木。

(61) 大仏殿の西方にある。

(62) 雲井坂の夜雨は、南都八景の一つ。南都八景の歌は、権中納言藤原為重（冷泉為重）が詠じたとされている。

(63) 轟橋の旅人は、南都八景の一つ。南都八景の歌は、小倉前中納言実遠（小倉実遠）が詠じたとされている。

(64) ミツ藏の南から東に行く門の前に塀があり、この塀の北にある。

(65) 歌は伊勢大輔が詠じ、『詩花和歌集』に収められている。

- (66) 北室から北に春日社の中院を移し、寺僧が五人ずつこもるからとも、昔中院屋より東に大乘院、西に一乗院があり、両院の中院の屋からともいわれている。
- (67) 北僧坊の北西にある。
- (68) 養老五年(七二二)、藤原不比等の周忌の終わりに建立。本尊は、運慶一門の手により作られた。
- (69) 食堂の北にある。食堂に籠って学問した僧達の食物を整えた。
- (70) 細殿の北にある。
- (71) 西金堂の南にある。西国三十三カ所の観音霊場の巡礼九番札所である。
- (72) 金堂の東西、塔の北側にあり、回廊と築地で囲まれる。応永二十二年(一四一五)に再建された。
- (73) 花源磐は華源磐とも記される。天平五年(七三三)以前の渡来品とみられる。酒濱浮磐は山東省の泗水から産する名石をもって、盤を作ったとされる。裏面には隸書で「壁山玄玉」と刻まれる。
- (74) 【源平盛衰記】には中金堂釈迦三尊の眉間の玉とされる。玉中の釈迦像がどこから見ても同じに見えることから、こう呼ばれる。
- (75) 藤原不比等のこと。後述の「房崎の大臣」は息子の藤原房前。
- (76) ここでは能の「海土」を指す。
- (77) 現存のものは応永三十三年(一四二六)の再建。
- (78) 享保二年の大火で焼失した西金堂か。その後再建はされず現在は塔頭「興善院」が所在している。享保の大火の際に焼け残った木造の仏頭に「西金堂釈迦」の墨書がある。
- (79) 神事能の一つ。興福寺の修二会に南大門の芝の上で四座(金春・観世・金剛・宝生)の大夫によって行われた。
- (80) 奈良市芝新屋町にある華厳宗・真言律宗の寺。飛鳥元興寺の後身で、養老二年(七一八)平城京に移建。南都七大寺の一つで、三輪・法相宗を伝えたが、中世の土一揆でほとんど消失。